

# 関連性理論から読み直すデイビッドソンの隠喩論

大浜 るい子  
(1999年9月30日受理)

Metaphor in D. Davidson

Ruiko Ohama

Es wird traditionell angenommen, daß ein Metaphor außer der wortwörtlichen Bedeutung noch eine andere besondere Bedeutung hat. Unter dieser Voraussetzung ist die Aufmerksamkeit in den meisten bisherigen Forschungen hauptsächlich darauf gerichtet worden, was diese zweite besondere Bedeutung ist. Davidson (1978) lehnt aber diese Voraussetzung ab und behauptet, daß ein Metaphor nur eine wortwörtliche Bedeutung hat und daß die Metaphor-Forschung nicht darauf konzentrieren soll, was das Metaphor bedeutet, sondern auf die Beziehung zwischen einem Metaphor und dessen Effekt, der sich in einer konkreten Situation vollzogen hat. Dieser Standpunkt steht der Relevance Theorie von Sperber und Wilson (1986) sehr nahe. Es wird oft gesagt, daß Davidson schwer zu verstehen ist. Es scheint mir aber, daß uns diese Theorie das Verstehen erleichtert. Die folgende Arbeit ist ein Kommentar und/oder eine Interpretation über Davidson vom Standpunkt der Relevance Theorie aus gesehen.

「隠喩は言語の dreamwork である」(49)<sup>注</sup>

「隠喩はその最も字義に忠実な解釈において意味するところのものを意味するのであり、それ以上のいかなるものをも意味するものではない。」(49)

「隠喩は言い替えることが出来ない。言い替えは語られていることがあって初めて問題になる」(50)

「隠喩は写真とか、頭上の一撃のように我々にある事実を気づかせる」(65)

に出た後であれば、これら奇をてらったかに見える表現の真意がもっと理解され、素直に受け入れられたのではないかと思われる。というのも、デイビッドソンの隠喩論には、既に関連性理論を手にした我々には馴染みの考え方が随所に見られるからである。

本稿では、デイビッドソンの隠喩論の広い行間を関連性理論で埋めながら、彼が隠喩をどのようなものとしてとらえていたかを明らかにする。

## 0 はじめに

冒頭に見るように、デイビッドソンの隠喩論(1978)には一見奇をてらった表現や比喩表現が多い。それらインパクトの強い表現が文脈から切り離されて引用され、また読む側に自由な解釈を許す中で、彼の隠喩論は正当な評価を受けてこなかったのではないだろうか。責任の一端は彼自身にある。説明が十分ではなく、「議論も飛躍が多いため明瞭とはいいがたく、その展開を正しく追っていくにはかなりの努力が要求される」(高頭1999, p.67f.)からである。しかし、筆者にはそのことよりも出版がもう10年遅ければ、すなわちスペルベルとウィルソンの『関連性理論』(1986)が世

## 1 「隠喩には字義通りの意味しかない」

隠喩は、字義通りに解釈される通常の表現とは異なり、字義通りではない特別な意味があると考えられることがしばしばである。字義通りに解釈すると非現実でナンセンスな文になってしまうため、おそらく話者は字義通りではない何か別な意味で言っているはずであるということになる。しかし、デイビッドソンは隠喩も「諸々の語がその最も字義に忠実な解釈において意味するところのものを意味するのであり、それ以上のいかなるものをも意味するものではない」(49)と言う。この様に言われると一瞬驚くが、従来あるとされてきた「字義通りではない何か特別な意味」という

のは、隠喩の使用によって「結果的にもたらされたもの」であり、「効用」「効果」であると聞くと、今度は早計な読者は単なる表現の違いかと安心する。しかし、議論が「効果」に及ばず、「字義の意味」ととどまるのがわかると、菅野 (1985) のようにいらだち、以下のような失望を表明することになる。

デイビッドソンが「意味」という時考えているとおぼしい、事態を記述する平叙文の意味は、意味のパラダイムであるどころか、我々が普通に解している意味とはほとんど呼べない代物であって、それは論理学者の言う、文の論理形式とか真理条件に代替しうるものなのである。むしろ隠喩の意味こそ、いかにも意味らしい意味であろう。「意味らしい意味」というのが曖昧だというなら、それは我々に最も親近な、ごくありきたりの意味であると言い直してもよい。

(菅野 p.49 強調筆者)

確かに我々が隠喩の意味というとき、その興味は隠喩に用いられた表現それ自体の字義の意味ではなく、その隠喩によってどのようなことが意図されたり含意されるかという、そちらの方の意味にある。しかし、これは隠喩のみならず、通常の言語表現 (特に間接的発話行為) においてもしかりである。それを「効果」と片づけ、隠喩の意味はあくまで字義通りに解釈される意味以外のものではないと主張するデイビッドソンを、菅野は「問題を解決する代わりに、問題そのものを解消」(菅野 40) させ、やっかいな問題を先延ばしにするために「語用論の部門へ追いやった」(菅野 49) と考えている。だが、はたしてそうだろうか。

## 2 意味と使用

語用論では文と発話の区別は重要である。発話が個別の具体的であるのに対し、文は発話から発話の場所や時、発話者、文脈、語調などあらゆる非言語的要素を捨象し抽象化したものである。文としての意味は一つでありながら、それらが発話となると様々な意味を持つことを認めない人はいないだろう。語用論の興味は我々がときどきの場面で文の意味から発話の意味を導き出すことが出来るのはいかにしてか、そのメカニズムを解明することである。

ところが関連性理論によれば、従来の語用論においては、文の意味からときどきの発話の意味を導く手順が、常に成功を保証する形で考案されていたという点で、非常に強いコード理論であったと言う。コード理論では、以下のことが前提になっている。

- (1) 発話には発話者自身が想定する「発話の意味」が存在する。
- (2) コミュニケーションとは発話の意味が伝達 (了解) されることである。
- (3) 文の意味と発話の意味を関係づける手続きが確立し、固定している。

しかし関連性理論は、たとえ稀ではあっても実際には手ぶりや身ぶりだけの、コードを使用しない伝達があり得ることから、コードは伝達に不可欠なものではなく、不可欠なのは推論であると言う。言語表現の場合、その言語に通じている聞き手は自動的にそれらのコードを解読するが、発話が意味することは、字義通りでない場合はもちろんのこと、字義通りであると考えられる場合であっても必ず推論過程を経る。指示対象の確定、多義性の除去、拡充が行われて表出命題を獲得する過程は、コード解読では実行できないからである。コード理論に代わって「推論」を基本に置く関連性理論は上の(1)~(3)の前提は実状にあっておらず、次のように考えるべきであるという。

発話者が想定するのは発話の意味ではなく、発話によって生じる効果である。そして効果は伝達されるものではなく、聞き手が推論によって自ら導き出すものである。発話者は自分のねらい通りの効果を聞き手が導き出してくれるように、考えられる限り適切な言語表現を選ぶ。言語表現 (= 発話) は効果を導き出すための手がかり、あるいはきっかけであり、決して効果自体 (= 発話の意味) を発話内に担っているものではない。効果が聞き手の推論能力や推論において利用される知識などに影響を受けるものである限り、一義的に成立する効果というものは想定できない。すなわち話し手と聞き手の間で効果 (= 発話の意味) の一致を保証することは出来ない。それ故もちろんそれらの間を固定的に関係づける手続きの存在も考えられない。

デイビッドソンが隠喩について考えていたのも、まさにこのようなことであつたと思われる。彼が「徹底して批判しようとしている (従来の隠喩論の) 中心的誤謬」(65) は「隠喩が何らかのメッセージを携えているという考え、すなわち隠喩が内容とか意味 (もちろんその字義上の意味は除く) とかを持っているという考え」(64)、「隠喩には、隠喩の作者が伝えようとしている認知内容が付随している」(65) という考えである。

これは、デイビッドソンが隠喩になんら特別な意味あるいは効果を認めないということでは決してない。隠喩が発揮する芸術的效果 (49) や驚異的效果 (51) は存在する。ただそのような意味あるいは効果が、

聞き手による隠喩の解釈以前に、発話者によって想定され、隠喩そのものの中に存在すると考えることを問題にしているのである。「隠喩の解釈には創作者と共に解釈者が大きな関わりを持ち」「解釈という行為そのものが、隠喩を創作することと共に、創造的な試みである」(49) というのは、このことを意味している。だから隠喩が、あらかじめ存在する意味を「伝える媒体(筆者強調)」(50) であるという考え方も、「解釈はその伝えようとしている認知内容を把握して(筆者強調)」(65) はじめて可能になるという考え方も共に「これは誤りである」(65) と断定している。

隠喩の意味が伝えられるべきものではなく、聞き手の解釈によって結果としてもたらされるものであるとすれば、それは個別な場面に固有のものであり、常に同様であるということではない。場面の数だけ意味があるといってもよい。

その意味でデイビッドソンは、従来の隠喩論が解明しようとしたことは、隠喩のそのような意味を完全に挙げきってしまうとする試みであったと批判している。もちろんそれが可能であるという前提があったことも指摘しなければならない。デイビッドソンは、それは「地図の海岸線を指でなぞっていったり、ピカソのエッチングの美しさ、巧みさを論じ始め」(65) ることと同じであり、そんなことをしようとするれば、「いったいどれくらい多くの事柄が我々の関心の的になるだろうか。あなたはおそらく膨大な数の事柄を挙げなければならないであろう。しかしそれでもあなたは挙げ終えることはできないだろう」(65) と書いている。

デイビッドソンによれば、隠喩論というのは「隠喩は何を意味するか？」を論じることではない。従来の隠喩論はほとんど全てがその種のものであった。それらに意味があるとすれば、「繊細で教養の高い読者たち(=隠喩の研究者たちを指す)が隠喩をどのように理解しているかを、怠慢で無知な読者に知らせ、彼らに熟練した批評家に近い視界を開く」(66) ことであろうが、隠喩そのものの興味はそんなことにはない。重要なことは、「いったい隠喩は、隠喩自体が我々に注目させるところのもの(=様々な効果(筆者注))とどのように関係しているのか」(64) という問題である。

すなわちどのようなメカニズムによって、字義通りにはしかじかの意味を持つ隠喩表現からその時々異なる効果を生み出すことが出来るのかという問題である。残念ながらデイビッドソン自身はその解答を示していない。関連性理論が表現の処理労力とそこから得られる効果の釣り合いによって説明を試みたのは、そ

れから約10年後であった。

隠喩研究におけるデイビッドソンの貢献は、議論の焦点を効果そのものから効果を生み出す仕組みに移したことである。そしてそれを明らかにする手がかりは隠喩の文字どおりの意味であることを指摘したことである。

### 3 隠喩は発話行為か？

隠喩には常に「ある種の、またある程度の芸術的効果が合意される」(49) が、それは隠喩の意味ではなく、効果、あるいは「何かをやり遂げたことの結果」(49) であることを主張するデイビッドソンは、同様のことを次のように表現する。

隠喩は全面的に使用の領域に属するものである。(51)  
隠喩を他の文と区別しているのものは意味ではなく使用である。(62)

意味と使用の対立はそれぞれ文と発話の対立を思わせ、発話は発話行為を想起させる。その上、上の引用(後者)に続けて次のように書かれるのを見ると、我々は彼が隠喩を一種の発話行為であると考えていたと結論づけたい。実際菅野はそのように結論づけている。

そしてそれ故にこそ隠喩は主張(assertion)、暗示(hinting)、嘘(lying)、約束(promising)あるいは批判(criticizing)と似ているのである。(62)

なるほど主張や暗示、嘘、約束は発話行為の典型例であり、これらは文の意味により区別されるのではなく使用の違いによる区別である。「隠喩を他の文と区別するものは意味ではなく、使用である」(62) と考えるデイビッドソンであれば、隠喩を発話行為と同列に考えているはずであるということになるのかも知れない。しかも、「隠喩という特別な用法(=使用)は、いかに間接的であるにせよ、「特別な何物かを述べる」ことではない」(強調筆者62) という文からは、言語が世界を記述するためだけに使われるのではないという事実を発見し、発話行為理論のきっかけを提供したオースティンを思い出させる。しかし、はたしてそうだろうか。以下菅野の議論の問題点を指摘しながら、デイビッドソンは隠喩が発話行為であるとは考えていなかったことを示したい。

まず菅野は次のように問題提起をする。「隠喩が意味に関係しないなら」すなわち隠喩が字義通りの意味

しか持たず、それ以外のいかなる意味も持たないとすれば、「隠喩混じりの陳述を行うことに何の益があるのだろうか」(菅野 42)。筆者には答は簡単なように思われる。デイビッドソンは隠喩の効果を否定していないのだから、そのような効果が生まれることに益があると答えればよい。ところが菅野は「デイビッドソンによれば、そのような陳述は断言、約束、嘘などに並ぶ、文の特定の使用であり一種の言語行為であって、立派にその仕事を果たすのである。」(強調筆者)と回答する。ここで「隠喩の効果」が発話者によって期待されていると考えることと、それが「一種の言語行為(=発話行為)」であると考えたことは、同じではないことに注意したい。前者は発語媒介行為への期待であり、後者は発語内行為へのそれであるからである。いかなる言語表現であっても、それ以外の表現を選択しなかったという点で、常に発話には何らかの効果への期待が存在する。だからと言って、全ての発話が常になんらかの発話行為であるとするのは極端な理論化の産物にすぎなく、現実の発話は、いかなる発話行為とも認定できないものが多いのである。もしデイビッドソンが隠喩を発話行為と捉えていたのであれば、なぜ「陳述、約束、嘘」などと言わずに、はっきりと「発話行為」という表現を使わなかったのだろうか。また陳述、約束、嘘などと「同じ」と言わずに、「似ている」と言うにとどめたのだろうか。これが第1の問題点である。

第2の問題点は、デイビッドソンがその際どのような発話行為を想定していたかについての菅野の理解である。彼は「隠喩は二つあるいはそれ以上の物事とのなんらかの類似、しばしば新奇な驚くべき類似に我々が留意するよう仕向けるのだ」という部分(デイビッドソン 51)を引用し、デイビッドソンの見解として、隠喩混じりの陳述はある命題を述べた部分と「私はここにしかじかのもの同士との類似に君の注意を促すものである」という部分との連言へ分解できるとまとめている。菅野にとっては「これら二つの部分の働きは全く別の本性のもので、前者は元の陳述の「言わんとするところ」あるいは意味の全てを担うのであり、後者は単に言語行為の実をあげるための一種の力を揮うにすぎない」(42)。それ故「デイビッドソンの見解は、オースティンが発話行為 locutionary act と発語内行為 illocutionary act とを区別し、前者に意味 meaning を後者に発語内力 illocutionary force を割り振ったのにちょうど通い合うだろう」(42)ということになる。

ところが、デイビッドソンの引用は、原文ではまったく違った文脈で展開されている。「隠喩がある種の

類似性へと我々の関心を向けさせる」というのは、多くの人が認める、あるいは認めてきた「平凡で、しかし誤りない洞察」(51)であり、デイビッドソンもそれを否定するものではないが、「通常我々が類似と考えるものが、我々が通常意味と考えるものに付随しているため、隠喩が誘発する類似を説明するために、意味を想定してしまう」(52)という誤りを犯すことがあるのだという文脈である。すなわち類似するというのは、ある特性が共通に存在することを言うが、その特性が語の意味を構成していると考えられるために起こる混乱だというのである。この引用箇所は、決して菅野の言うように隠喩の行為的側面についての記述ではない。

また別なところで、デイビッドソンは直喩と隠喩を比較し、前者は「類似性があることを告げるが、何らかの共通の特徴を拾い上げることは我々に委ねる」のに対し、後者では「明確には何の類似性も主張しない。我々は共通の特徴を拾い上げるのではなく、探し求めるよう誘導されるのである」(下線筆者)(58)という言い方をしている。発話者から働きかけられるのではなく、結果的に探し求めるよう誘導されるという消極的な表現からは、デイビッドソンが隠喩を発話行為と捉えていたとは考えにくいというのが3つ目に指摘したいことである。というのも従来が発話行為理論(例えばサール)では、ある特定の発話行為(例えば陳述、約束)を遂行しようという話し手の意図が聞き手に認識されることがコミュニケーションの前提であったからである。すなわち、個々の発話は発話時点で遂行される発話行為が特定されており、それが聞き手に伝達されることが前提になっていた。発話行為の特定はいわば行為遂行レベルでの「意味」である。その点で文の意味と完全に同じではないが、解釈という聞き手の関与以前の意味の存在を否定するデイビッドソンが、そのような前提を持つ発話行為を認めるとは考えにくいのである。

従来が発話行為理論は、ある特定の発話行為を遂行しようという話し手の意図が聞き手に認識されることがコミュニケーションの前提であったが、関連性理論は、全ての発話行為においてそのような前提が必要なわけではなく、そのような意図を聞き手に認識させることが必要な行為とそうでない行為があることを指摘している。たとえば約束や賭などの行為は話し手が約束、あるいは賭をしようとしていることを聞き手が認識しなければコミュニケーションが成功したとは言えないが、それ以外の発話行為(たとえば警告、提案、懇願)のように、行為遂行がうまく行くかどうか話し手の意図の記述を聞き手が復元できるかどうかには

かかっていない例も多くあるという（ブレイクモア 131f.）。この様な例の場合、発話の主な関連性は命題そのものにあるという。すなわち、「使用」でありながら、行為の側面ではなく「命題内容（＝字義的意味）」こそが重要である場合が存在するという指摘である。デイビッドソンが隠喩を使用の問題と捉え、うっかりすると発話行為理論の枠内へ入りそうな所を、あえて発話行為であるとは言わなかった背景に、この様な事情をおぼろげに察知していたことがあるのではないだろうか。

隠喩は発話行為ではない。隠喩が発話行為であれば、隠喩自体が、陳述、誓い、約束、命令などさまざまな発語内行為に使用できることが説明できないとは、菅野の批判である。そしてこの批判は正しい。菅野はデイビッドソンは隠喩を発話行為レベルで扱おうとしたことを評価しながら、この様な矛盾を理由にその試みは成功しなかったと結論づけている（菅野 p.45 参照）が、実はデイビッドソン自身も隠喩を発話行為であると捉えていたわけではなかったのである。

ではなぜ、発話行為である主張や約束、嘘と似ているなどということを行ったのであろうか。それはある言語表現（たとえば「明日来ます」）が主張や約束、嘘に使用されるからといって、「明日来ます」という表現には異なる3つの意味があるとは言われないということを考えていたのだろう。隠喩も意味としては字義通りのものがあるのみで、従来考えられてきたような特別な意味を担ったものとしての隠喩というのは、それぞれの場面で使用され発揮する異なる効果であるにすぎなく、その効果は「明日来ます」という表現の意味」対「主張・約束・嘘等の使用」との比較で言えば、後者に似ていると言いたかったのであろう。

## 4 隠喩とは何か

しかしこの様に考えてくると、隠喩はなんら他の普通の表現と変わらないことになってくる。確かにデイビッドソンの隠喩論には、繰り返し、隠喩はなんら特別なものではなく、日常的な言語活動から区別できるものではないことが強調される。

デイビッドソンは、隠喩の創作と並んで、隠喩の理解そのものも創造的試みであるといった直後に「この様に指摘したところで、（中略）隠喩をより日常的な言語活動から区別できるわけではない。言語によるあらゆるコミュニケーションは、独創的構成と独創的解釈の相互影響を前提としているからである。」（49）と述べている。

また、隠喩を直喩が短縮されたものとする立場を

批判する場合でも、それは、どちらの場合も共通の特徴を「拾い上げさせる」という言い方をすることを問題にしているのであり、どちらの場合も同様に類似へ我々の関心を導くものであるという点では共通であることを認めている（59）。それどころか、直喩でも隠喩でもない、全く通常の文であっても、同様の類似へ我々の関心を導くことがあることを、T. S. エリオットの『河馬』を例にして示して見せている。すなわち隠喩に固有と思われていた「二つあるいはそれ以上のものごとの間のある種の類似、しばしば新奇な、あるいは驚くべき類似へ我々の関心を向けさせる」（51）のは、隠喩のみならず、直喩でもあるいはそもそも比喩表現でないものでも可能であるというのである。隠喩と直喩は「我々を様々な比較へと誘い、我々の関心を世界の様々な側面へと喚起する、無数の努力の中のほんの二つにすぎない」（59）と言う。「隠喩がその業としている、予想もされないような、あるいは微妙な類似やアナロジーへの誘導」（59）が、実は隠喩のみならず無数の言語形式によって可能であるという立場をとるならば、その業に相当するものを言語形式に求めることは出来ないことになる。業への手がかりとして我々に残されたものは、語の字義上の意味のみであり、また実際我々は「それ以上のものを必要とはしない」（59）のである。

関連性理論にあっては、発話、そしてそこで用いられる言語形式は、字義の意味以外には決して伝えるべき意味内容をそのうちを持つものとしては考えられていない。字義通りに解読された意味こそ手がかりとし、聞き手は自身で認知環境を拡大し、効果を推論によって導く。その際聞き手は処理に要する労力と獲得できる効果を天秤をかけながら、自らにとって最適な効果が得られるまで処理を重ねる。

デイビッドソンの隠喩はまさにそのようなものとして考えられていたと思われる。一つの隠喩から繊細で教養の高い読者と怠慢で無知な読者（66）が異なる効果を引き出すことがあるのは、最適な効果をどこに設定するかの違いである。前者の豊かな効果が後者にとって啓発的でありはしても、そのこと自体は小さなことである。重要なことは、どちらの効果も最適な関連性が求められて、処理され、得られたものであるという点である。ただ、デイビッドソンではそれが暗示的、あるいは予見的であるに留まっていたと言わなければならない。

## 5 おわりに

デイビッドソンの隠喩論を関連性理論によって解釈

してきたが、しかしこれで隠喩の問題が片づいたとは思えない。隠喩がその処理過程についても、処理への引き金になるきっかけについても、またその時働く原理についても、なんら通常の言語使用と変わらないとしても、隠喩はまず第一にその多くが非現実でナンセンスな文である。この一点は大きな違いである。隠喩が創造された後の扱いが、いくら通常の言語使用と変わらないと言っても、そもそもなぜ我々はこの様なナンセンスな事柄や事態を思いつけるのだろうか。関連性理論はそれらを、語の近似的使用 (loose talk) や誇張表現、他者の発言の報告、あるいは翻訳等、厳密に言えば偽である通常の言語使用の延長線上にあるもので、決して特別なものではないと言う。レイコフ・ジョンソン (1980) はむしろそのような非現実でナンセンスな隠喩こそが基本であり、全ての言語活動が隠喩によって成り立っているとまで言う。いったい隠喩とは何か？ここに至って改めて問われるが、それについては別の機会にゆずりたい。

## 注

以下 ( ) 内の数字はすべてデイビッドソン邦訳からの引用ページを表わす。デイビッドソン以外の引用は著者名と共にページ数をあげている。

## 参考文献

- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances. an introduction to pragmatics.* Blackwell. 武内道子・山崎英一訳『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房
- Davidson, D. (1978) *What Metaphors mean.* in: Sheldon Sacks (ed.) *On Metaphor.* Chicago Uni. Press. 29-45. 高頭直樹訳「隠喩は何を意味するのか」【現代思想】Vol. 15-16. 49-69.
- 深谷昌弘・田中茂範 (1996) 『コトバの意味づけ論』紀伊国屋書店
- Lakoff, G. / M., Johnson (1980) *Metaphors we live by.* Chicago Uni. Press. 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳『レトリックと人生』大修館書店
- Sperber, D. / D. Wilson (1986) *Relevance. communication and cognition.* Harvard. 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳『関連性理論 伝達と認知』研究社出版
- 菅野盾樹 (1985) 『メタファーの記号論』勁草書房